



VR文化フォーラム'02における 国立故宮博物院のデジタルアーカイブ

◆台湾側主催者

高橋李穂

IAMAS

VR文化フォーラム'02における国立故宮博物院（台湾故宮）のデジタルアーカイブについて、開催に至る経緯とアーカイブの内容を述べる。開催の経緯は、筆者が台北の生まれで台湾故宮で中国の伝統芸術を知り、モダンアートとデザインを学んだ後、日本と米国でコンピュータグラフィックス(CG)を習得して、1990年に台湾でCG研究を立ち上げたことに始まる。その頃から台北市立美術館で河口洋一郎教授とコンピュータアート展を開き、台湾国立交通大学の施教授とCGの国際会議を開催して、台湾コンピュータ協会の大手のコンピュータメーカーと台湾シリコンバレーでCGブームを起していった。1999年に再び台湾のVRの活動を興し、台湾大学の欧陽教授と共にICAT2000を運営した際に、筆者は遺伝的アルゴリズムを用いた進化モデルで台湾国家科学奨励賞を受賞し、台湾故宮のデジタルアーカイブと関わっていった。2000年に岐阜県立情報科学芸術大学院大学(IAMAS)の立ち上げに加わるため日本に戻り、坂根巖夫学長の御理解のもとVR文化フォーラム'02の故宮開催を引き受け、台湾故宮のデジタルアーカイブの紹介を加えることができたというわけである。

VR文化フォーラム'02における台湾故宮のデジタルアーカイブの内容は、台湾の所謂“禮樂之邦”のシンボルであるコレクションの“鼎”と“鐘”のVR楽器によるリアルな宮殿音楽、そして現在の台湾故宮のデジタルアーカイブの映像であり、これらを用いて日本VR学会を迎えた。台湾故宮の国宝コレクションは、触れられないため様々な方法を試み、撮影の歪みやCG作業の寸法ズレなどを除いた正しい画像データの取得にレンジファインダーの手法を用いて行うことにした。一方、“鐘”コレクションが2400年前に中国では宮殿で使われていたという記述に基づくと、元は国主が天地に雨を祈る時や戦場に行く時等に“鐘”だけの楽器を用いてソロで

神聖な音楽を演奏していたということである。その後、“孔子制禮樂”により、64個の鐘から128の音の“編鐘”に編成し、国主のシンボルの鐘を1個加えて、宮殿音楽の開始と終了に使われ、東洋音楽の楽理を完成していった。この貴重な“編鐘”コレクションのレプリカは世界で3セットしか作られていないが、一つは中国の湖北博物館の展示として使われ、一つが世界中で演奏して回り、もう一つが、台湾との文化交流として購入され、友好的な共同研究が行われている。日本における台湾故宮との研究は、力学型の“VR楽器”として行うことにした。

IAMASは、VR文化フォーラム'02における台湾故宮と日本の新たなアーカイブについて、国宝コレクションのデータベースをインタラクティブに鑑賞でき、また“VR楽器”により西洋音楽から東洋音楽への検証をしながら、新たな現代音楽を創造できるような没入感を体験できることを考えている。今回VR文化フォーラム'02で紹介した台湾故宮デジタルアーカイブの新規性は、従来のアーカイブ制作と違って国宝コレクションのデータベースの作成と保存だけではなく、次世代の学習と理解のためのインタラクティブな体験型の手法であり、これにより新たな台湾故宮を追求することであった。そこで台湾故宮の本館には、従来の中国からの伝統文化や国宝コレクションなどの展示を維持しながら、現代台湾故宮として新館の展示を設けて“兩岸故宮”をVRの手法で体験してもらおうものである。この為に筆者の在職しているIAMASには無いレンジファインダーや力学型の“VR楽器”等の機材を東京工業大学の長橋教授と佐藤教授の協力で使用させて頂いている。今後、VR文化フォーラム'02で培った新たなパートナー関係と機材の充実をすすめて、台湾故宮と日本のデジタルアーカイブ研究を発展させていきたいと考えている。

台湾故宮で開催されたVR文化フォーラム'02では、3つのセッションがそれぞれ新たな芸術の創造やVR空間との関わりを紹介した。こうした中で新たなデジタルアーカイブへの関心を呼び寄せて、世界文化財へのVR分野のさらなる発展を期待したい。